

医療薬学フォーラム2016

第24回クリニカルファーマシーシンポジウムの 聴き処

立命館大学薬学部分子薬物動態学研究室

教授 藤田 卓也

●医療薬学フォーラムのあゆみと薬剤師をめぐる環境の変化●

医療薬学フォーラム2016/第24回クリニカルファーマシーシンポジウムの大会実行委員長を務めさせていただきます立命館大学薬学部・藤田卓也でございます。

本フォーラムは日本薬学会医療薬科学部会が主催し、日本薬剤師会および日本病院薬剤師会の共催で、2016年6月25日、26日の両日、滋賀県大津市にございます滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールを中心とした3会場で開催いたします。

医療薬学フォーラムは、1985年に第1回が堀岡正義先生により福岡で開催され、その後参加者数が順調に伸び、医療薬学のコアとなる学術集会に成長しました。本フォーラムは医療薬学が担うべき教育・研究の推進、医療現場における薬剤師の資質の向上、そして薬物療法の改善に向けて、病院薬剤師、薬局薬剤師、薬系大学の教育・研究者や学生、製薬企業研究開発・医薬情報担当者などが全国から多数参加し、意見交換、相互交流の場となっております。

薬剤師をめぐる環境は、ちょうど第1回の本フォーラムが開催された1985年前後を境として大きく変わってきており、病院薬剤師は調剤のみならず、医薬品情報、TDM、薬剤管理指導、抗がん剤やTPNの無菌製剤調製、治験など薬物治療に直結した業務に従事するようになり、一方、薬局薬剤師は、在宅医療や、地域健康サポート薬局のかかりつけ薬剤師として地域住民の健康増進に更なる貢献が求められております。一方、薬学教育に目を向けてみると、本年は薬学教育6年制が開始されてちょうど10年目となり、質の高い薬剤師の養成を目指して導入された病院・薬局での長期実務実習において大学と実習施設との更なる連携が改訂モデルコアカリキュラムでも求められております。このように医療薬学は、薬剤師業務や薬学教育の両面から進歩を遂げるとともに、医薬品の適正使用、医療安全を担保するための「科学」としての基盤も着実に構築されてきております。しかし、更に医療薬学を「科学」

として体系化するためには、医師を始め他の医療関係者とは別視点、すなわち日本薬学会が基盤とする「創薬科学」視点の薬物療法の科学性を追究していくことが重要であると考えます。そこで、こうした「創薬科学・医療薬科学」を基盤として、医療薬学との連携を図り、更に発展することを願い、本年度のフォーラムは、「創薬科学と医療薬学のさらなる連携を目指して」をメインテーマとして開催いたします。このテーマに相応しい内容を考慮して、特別講演、教育講演、15のシンポジウム、ポスター発表を企画しました。いずれのテーマも薬剤師の業務、薬剤師教育、薬学教育、基礎研究・薬物治療の分野に及んでおり、活発な討論や意見交換が期待されます。それでは、これらのなかからいくつかをピックアップして聴きどころを紹介いたします。

●特別講演・教育講演●

特別講演は、滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門教授であります三浦克之先生にお願いしました。三浦先生は、滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門教授のみならず滋賀医科大学アジア疫学研究センター長として、

- ・アジアにおける循環器疾患・糖尿病に関する疫学的エビデンスを明らかにする。
- ・アジア各国からの留学生の教育拠点となり、アジア各国において活躍する生活習慣病疫学の専門家、リーダーを輩出する。
- ・最先端科学技術を用いた疫学研究により、世界一の高齢化社会である日本から、世界に先んじたエビデンスを発信する。
- ・滋賀医科大学を中心とする政策疫学研究のエビデンスが、日本の健康施策の骨子となり国民の生活習慣病予防に貢献する。

などを目的として非常に精力的な研究を進められております。

本フォーラムでは、「治療効果判定のための疫学的手法とその落とし穴」を演題としてご講演いただきます。先生がこれまで進められてきております、わが国が10年に一度実施してきた循環器疾患基礎調査の後継調査として、国民健康・栄養調査と同時に行われる循環器病の予防に関する調査（ニッポンデータ2010）結果の紹介などを中心として、わが国における脳卒中、心筋梗塞、心不全など循環器病の予防方法などを中心に講演をいただく予定です。国内および世界における疾病構造や生活習慣・生活環境が時々刻々と変化するなか、医療の分野において公衆衛生学・疫学の果たす役割は今後ますます大きくなると考えます。薬物治療の面のみならず、予防医学の観点から薬剤師が果たすべき役割を考えるきっかけとなる貴重なご講演をいただけるものと考えております。

教育講演は、神戸大学医学部附属病院薬剤部長・教授、平井みどり先生にお願いしました。平井先生は、薬剤師・医師両方の資格を有しておられ、薬学・医学双方の視点から薬剤師教育、薬学教育を精力的に進められております。研究面では、患者さん個々に最も適した薬物治療法、いわゆるテーラーメイド薬物療法の確立を目指し、薬物代謝酵素、薬物輸送担体などの薬物体内動態を規定する因子と、治療効果や副作用発現に関与する各種因子について、それらの遺伝子型や検体中における遺伝子発現量等の解析を行い、治療の個別化・最適化に

反映させることを目的として精力的に研究を進められております。本フォーラムでは、「高齢社会における薬剤師の役割～多様性と新しい医療モデル～」と題しまして、こうしたゲノム薬理学を基盤とした薬物療法の紹介のほか、フォーラムに参加される若手薬剤師に対して、これからの薬剤師のあり方についてもご講演いただく予定です。

●シンポジウム企画●

シンポジウムは、15のテーマを企画しました。医療薬科学・創薬科学の面からは、私の専門研究領域の1つであります「製剤学」の視点から2つのテーマを設定しました。1つは「小児用医薬品開発の現状と取り組み」です。このテーマは、日本薬剤学会のフォーカスグループとしても活動を展開しており、昨年11月の病薬アワーでも昭和大学薬学部・原田先生が紹介されております。わが国では、小児に使用される薬剤の60～70%が添付文書に小児の用法・用量が記載されておらず、医師の裁量で適用が使用されている実態、小児用にデザインされている製剤や剤形がほとんどない実態を踏まえ、その解決に向けた企業・薬剤部での実践例を国立成育医療研究センター薬剤部長・石川洋一先生をオーガナイザーして企画しました。また、小児のみならず患者に優しい製剤を志向した製剤開発・使用の実践例に関しても1つシンポジウムテーマを設定し、ジェネリックメーカーでの新規製剤開発の現状に関しても講演を頂きます。

一方、薬物療法の面からは、本年3月31日に日本病院薬剤師会より「プロトコールに基づく薬物治療管理 (PBPM) の円滑な進め方と具体的実践事例 (Ver.1.0)」が報告されたことから、その内容紹介につきまして「プロトコールに基づく薬物治療管理 (PBPM) のアウトカムと今後の展開」、および「ファーマコメトリクスを活用した薬物治療の最適化」をテーマとしたシンポジウムを企画しました。

また、薬局薬剤師が直面する問題に関しては、厚生労働省が推進をする地域包括ケア、健康サポート薬局についての現状・実践例についてテーマを設定し、厚生労働省・浦克彰氏の基調講演を含め4名の先生より講演を頂きます。

薬剤師教育・薬学教育に関しては、「薬学臨床教育の時代へー学生・大学・病院・薬局の循環共育」と題して、新モデルコアカリキュラムに対応してアウトカム基盤型教育 (outcome-based education) のあり方について講演を頂きます。また、「チーム医療に対応できる薬剤師の養成に向けて：教育－連携－研究への展開」をテーマとしてシンポジウムも企画しました。その他「医薬品、医療機器等の市販後安全管理とビッグデータの活用」「抗癌剤の医療経済評価－医療現場や社会への応用」など7つのシンポジウムを企画しております。現場薬剤師、大学教育者、学生をはじめ、全ての参加者が興味を持って討論に参加できるプログラムとなっております。

以上、医療薬学フォーラム2016の聴きどころを簡単ではありますが紹介させていただきました。関西での本フォーラムの開催は2009年以来7年ぶりとなります。開催会場は、滋賀県大津市ですが、京都駅からJR、徒歩でおよそ20分と非常に交通の便もよく、多くの皆様のご参加をお待ちしております。